

藤田幽谷「高山處士を祭るの文」

仲田 昭一

皆さんお早うございます。本日は二回目と致しまして、藤田幽谷先生の「高山處士を祭るの文」ということで、銘文の中の「祭文」というものを、ご一緒に勉強させて頂きたいと思えます。

まず、幽谷先生と高山彦九郎との関係、これについてお話を申し上げたいと思いますが、最近、高山彦九郎の記念館が誕生いたしました。それは、高山彦九郎の出身地でございます群馬県の太田市にあります。平成五年に、これは丁度没後二百年に当たる年でしたが、太田市が主催をして、没後二百年の記念式典が行われました。さらに平成九年には、生誕二百五十年を迎えるのです。そういう意味もありまして、本年、平成八年の五月三日に高山彦九郎記念館が太田市の公立館として誕生いたしました。さほど大きいものではございませんが、個人を顕彰する記念館というのが公立で造られたということは、全国的にも珍しいことだと思います。今、公立で個人を顕彰するということは、かなり問題がありそうな雰囲気かと思えます。にもかかわらず、高山彦九郎が誕生した家のそばにこの記念館が造られたということは、太田市の高山彦九郎を顕彰しようという、そういう意気込みが十分伺えるものと思っております。テーマは、「時代の旅人・高山彦九郎」というとらえ方をいたしまして、そこに、出生と郷土の歴史・風土、思想・学問形成、服喪の実践と人間的魅力、旅の足跡、京の彦九郎、人びととの交流、旅の終焉とその謎、その後の顛末、という八つのテーマでまとめております。機会がありましたら、どうか訪ねていただけたらと思います。

高山彦九郎という人物は、どのような人物であったのか。歴史小説家としてだいが名前をあげております吉村昭さんという方がおります。水戸に関しましては、『桜田門外の変』とか、『天狗騒乱』等の本があります。その吉村さんが、『彦九郎山河』という小説を書かれました。文芸春秋社からです。昨年九月に出されております。こうして、現在高山彦九郎も注目をされる人物の一人になっております。

彦九郎について年表をみますと、延享四年（一七四七）に現在の群馬県新田郡の細谷に誕生致しました。この高山家についてまいりますと、この細谷郷といのは、旗本筒井氏の領地なのです。その旗本というのは、幕府体制についているわけでありますから、この細谷の名主として、当時の細谷地区を治めていた高山家

からすれば、どうしてもこれも幕府体制側の考え方にならざるを得ないと思います。ところで、この高山家は、どのような先祖の働きがあったかといえますと、彦九郎は宝暦九年（一七五九）、十三歳の時に『太平記』を読み、先祖の高山遠江守が、新田義貞十六騎の一人として活躍し、殉死したということを知りまして、大変感激をして、自分もそのような志を受け継ぎたいものだということを感じるわけです。このことからしますと、彦九郎には、家は幕府体制の中にありながらも、朝廷のことに意を用いていくという考え方が当然出てくるわけです。それと同時に、父親の彦八も早くから神道を学んでおりました。祖父の貞正もそうなのです。祖父も父も神道に志がありまして、自然に尊皇の気持ちが起こっていったようです。さらには、父彦八が、明和事件に関連して幕府側の人物に殺害されるということが起こりました。明和四年（一七六七）のことです。江戸で山県大弑が尊皇論を説いて幕府から処罰をされ、命を落としております。これに関連したことで父親が倒されたらしいのです。

それから宝暦八年（一七五八）に竹内式部が、京都で尊皇論を説いてやはり処罰をされておりますが、このように、当時尊皇論を説くということは、命掛けのことであったのです。しかしながら彦九郎は、このような雰囲気の中で、段々尊皇論を強く持つようになったのです。

ところで、彦九郎は明和元年（一七六四）十八歳の時に初めて上京しました。そして有名な三条大橋から座して御所を遙拝するのです。その姿が、現在でも三条大橋のところに銅像として残っておるわけです。

そこで、この時に上京したときの手紙を見ます。これはお祖父さんに宛ててあるわけなのですが、

高山彦九郎出郷に際し、祖父当ての書簡

奉一通候、拙者京学二罷出候、此義申上度奉存候得共、却て御留可被成と奉存、密罷出候、京都二知人御座候て、此人の方へ罷越可申と奉存候、必々御案事被成下間敷候

一 帯刀は学者の法二御座候得は、一通言上仕、大小頂戴支度奉存候得共、此義申上候得は、罷出ル事御留可被下と存、密二蔵中の御宝備前兼光の刀、菊一文字の脇差取出シ、帯刀仕罷出候、何卒此宝拙者二せん別と思召可被下、拙者学文三四年も仕、罷帰可奉慈顔候、謹言

三月今夜 祖父様え

今から京都に出て、勉学に励みたいと思う。このことを申し上げたいと思うが、そうしますと、必ず止められるであろうから、密かに罷り出でたい。それで京都には

知人がおるので、この方に世話になります、ということ。帯刀、刀を帯びるということは、学者の決りでありますから、大、小刀を戴きたい。でも、このことを申し上げると、また、京に出ることを止められるので、密かに蔵の中に入って、備前兼光の刀と、菊一文字の脇差を取り出し、これを戴いてまいります、何卒饒別と思つて私に下さい。このような手紙を置いて、十八歳の彦九郎が京都に出るわけです。更には京都から山陰、山陽の方を旅をしておりますが、その頃、安永三年（一七七四）の二月十八日に、幽谷先生が誕生しております。丁度、彦九郎とは二七歳の違いになります。

年表によりますと、安永九年（一七八）彦九郎は富士登山をしておりますが、この富士登山の時に、中津藩の軍学者である梁又七に会い、無二の親友となつてまいります。それから天明元年（一七八一）には、江戸に出て、水戸の長久保赤水を訪ねております。それからこの年に、宮中の節会を拝観して「皇統面々宝祚長久のしるしと嬉しく云々」これはまことに、皇統が綿々として栄えていくであろう印だと、喜んだ気持ちを日記に記しておりますし、朝廷の学問が、盛んになるようにというので、学習院も建設しようと、こういう計画にも参画をいたします。それから天明の六年（一七八六）になりますと、彦九郎の祖母、りんと申しますが、この祖母が亡くなったことによつて、叔父さんの剣持正業と共に、祖母の墓前に小さな庵を建てそこで三年の喪に服します。これは、最高の喪に服すということです。祖母に対する非常な敬愛の念と、御恩に報いようという気持ち、それを実践するわけです。

一方幽谷先生は、この彦九郎のお祖母さんの八八歳のお祝いの為に、歌を作つたらどうか、ということを長久保赤水から言われまして、彦九郎のお祖母さんの米寿を祝う歌を詠んでおります。

高山処士祖母の米寿への祝詞

（イ） 上野高山君彦九郎王母八十八初度を賀す

階庭の玉樹紫蘭に肥ゆ、 孫子觴を稱げて北韋に獻ず、
膝下の醉歌塵外の興、
香風時に捲く老萊の衣

（ロ） 一正、嘗て高山君の奇節を聞き、未だ見ゆるを得ざるを以て憾となす、この頃赤水先生其の王母の壽詩の求め有るに因つて、聊か蕪章を呈し、併せて之を賦して奉呈す。

この時、幽谷先生は一三歳です。「一正、嘗て高山君の奇節を聞き、「これは長久保赤水から聞いておるわけです。「未だ見ゆるを得ざるを以て憾となす。「まだあなたにお会いしてないですが、それが残念なことです。この頃赤水先生が、その

王母の八八歳を記念する歌を作るようにということを依頼していたので、「聊か蕪章を呈し」蕪章というのは粗雑な文章ということです。これを呈して「併せて之を賦して奉呈す。」さしあげます、ということ。この中で詠んでおりますのは、次のような詩です。

聞く君が高節一心（身）の雄、奔走賢を求めて西復東、遊学元より懐く奇偉の策、正に知る踏海魯連の風

すなはち、あなたは高い志、勇猛心、それを以て西東と、賢者を求めて奔走しておる。その旅は、単なる遊学ではなくて、天下国家の革新を求めての旅であった。正にそれは、全国を行脚して、国家を正しい姿に建て直そうという、魯仲連の風貌を彷彿とさせるものである、というような意味がここにこめられているわけです。この魯仲連という人物ですが、戦国時代、斉の弁士でありました。秦が趙を攻めた時に、隣国の魏の王が、趙に対して、とてもかなわないから、秦に下つたらどうかと進言しました。その時に、ちょうど魯仲連が来ておったのです。その魯仲連が、礼儀を捨てて顧みない、しかも敵の首をあげて、功績を喜ぶような秦と、そういう秦の王を皇帝に抱くくらいならば、自分は東海を踏んで、（海に投じて死す、高潔なる節操）死んだほうがましだ、と言って気概を示し、秦に趙が報復することを防ぐわけです。このような気迫に秦王もやがて退却していくわけであります。この魯仲連というのは敢えて仕官をしないで、その勇氣と高節を以て諸国を歩いたという人物なのです。このような魯仲連の姿を、あなたの話を聞くことによって思い浮かべますということ。これによって、幽谷先生は一三歳の時に、すでに、高山彦九郎の気迫といえますか、その姿を充分承知しておったことがわかります。

その幽谷先生と彦九郎が対面するのは、寛政元年（一七八九）。幽谷先生の師匠でありました立原翠軒に従って江戸へ向かいました。この時初めて彦九郎と幽谷先生が対面するわけです。その時に、幽谷先生は「卓犖不羈、意気慷慨の士にして言行正しく一畸人なり」という言葉で彦九郎を表現しております。非常に優れた才識がある、意気盛んな、そういう人物で、正に畸人と評しても良いだろうと。畸人というのは優れた人物のことで、当時「寛政の三奇人」として、林子平、それから蒲生君平、さらにこの高山彦九郎、この三人が讃えられておりましたが、畸人という表現をしたのは、この幽谷先生が最も早い時期かと思えます。

この時に、彦九郎は、幽谷先生に対してどのような考えを抱いたか、ということを見ますと、

杉山亮「高山正之伝」【立原万（翠軒）宛て長久保赤水書簡として掲載】

（寛政元年秋）一正、万（立原翠軒）に随って江戸に在り、正之見て甚だ驩

ぶ、一正に謂て曰く、我天下を歴遊し、人に閱すること多し、未だ足下の如く卓越せる者を見ず、足下自愛せよ、言に因れば足下多病なりと、講学の余には宜しく武芸を試みるべし、劍は一人の敵と雖も、而して陣に臨んでは衆に先ず、身に精芸無かるべからず、且つ以て身体健やかに、亦勤学に益有るなりと、（中略）

我（彦九郎）遊歴を以て事となす、今日の行、万死固より甘んずる所なり、身後の事、復た念慮に閑わり無し、但し君に託すべく一事有り、某に息女（せい）有り、天下の名士を得てこれに与えんと欲す、藤田子定（幽谷）は国士無双、若し君（長久保赤水）によりてこれを箕帚の妾と為すを得ば、死するも結草たるべしと、

「一正、万に随つて江戸に在り、正之見て甚だ驩ぶ、」その時幽谷先生に向かつて言うには、私は天下を歴遊し、人に閱することは非常に多い。しかしながら、「未だ足下の如く卓越せる者を見ず、足下自愛せよ、」非常にすばらしい人物だ。どうか身体を大切にせよ、ということです。聞くところによると、あなたは非常に病が多い。「講学の余には宜しく武芸を試みるべし、」それで、勉学の暇には、武芸を習いなさい、「劍は一人の敵と雖も、而して陣に臨んでは衆に先ず、」劍術は大事なことであるから身につけよ、「且つ以て身体健やかに、亦勤学に益有るなりと」身体を丈夫にすることは、学問の助けにもなるだろう、こういうことを幽谷先生に言っているのです。そして、長久保赤水に対しては、君に託すべく一事有り、某に息女（せい）有り、天下の名士を得てこれに与えんと欲す、藤田子定（幽谷）は国士無双、若し君（長久保赤水）によりてこれを箕帚の妾と為すを得ば、死するも結草たるべしと、あなたに、赤水に、頼みたいことがある。自分には、娘のせいがある。それには、天下の名士を以て、嫁にやりたいと思う。幽谷は並ぶ者のない、天下の秀才だ。もし、赤水、あなたによつて、箕帚の妾、これは人の妻のことです。人の妻とさせることができたならば、恩に報いることができる。こういうことを赤水に伝えている。これを見ますと、幽谷先生も彦九郎に感嘆致しましたが、彦丸郎もまた幽谷先生に非常に感じ入ったということがわかるかと思えます。その後、彦九郎は寛政二年（一七九）の六月末に水戸に入りまして、七月一日に幽谷先生のお宅を訪ねることになります。それが次の資料です。

高山彦九郎『北行日記』（寛政二年七月朔日）

（四丁目伊勢屋で杉山忠亮の父策や岩田健文らと会った後）新道とて城南の沼に堤をなす事一六丁、左右に桃の木柳の木を植へたり、右に城を見、左に沼の大なるを見て西に過ぐ、二三所橋をも渡る、上八町下夕谷といへる所にて藤田

熊之助一正を尋ねける、早や予か来るべしとて待ち迎へたり、与助と名を替へたり、親を与右衛門と号す、よろこひ出でて冷麵に酒を出だす、夜半に及んで立つ、原玄与所へは至らずして止ミぬ、帰行に城内を通らんとせしかと、夜中分ち難くて堤を過ぎて立原氏へ帰り宿す、一正と大義の談有りける、一正能く義に通す、存慮の筆記を見ず、同じくは公よろしからんと示メしけるに、忽ち筆を取りて改めける、才子にして道理に達す、奇也とてよろこび語る事ありける、鶴見氏へ麻布一ツ藤田一正へ詩箋十枚を寄せける、

六月三十日に、立原翠軒の家に泊まりました。やがて七月一日になりました、

「新道とて城南の沼に堤をなす事十六丁、」これは千波沼です。そののへりを通っていくわけです。左右に桃の木、柳の木を植えたり、右に城を見て、左に千波沼の大きいのをみて、西に向かつて急ぎました。二、三箇所橋も渡りました。上町下谷町という所にて、藤田熊之助一正、幽谷先生のお宅を訪ねるのです。幽谷先生のお宅はどこかといえますと、現在の農協会館の近くです。東湖先生誕生の地という案内が出ております。行きますと、もう私が来るだろうというので、出て、待ち迎えてくれました。今は与助と名を変えていた。これは幽谷先生です。そしてその親を与右衛門と号す。よろこび出て冷麵に酒を出だす、これは冷たい素麵ようです。さらにお酒がだされました。夜半まで過ごして、原玄与の所へは寄らないで、また翠軒の家へ帰るわけですが、城内を通ろうと致しましたが、夜中で、暗い中なので、また堤を戻りました。この時に、「一正と大義の談有りける」幽谷と大義について色々と話をお互に交わした。「一正能く義に通す」義というものについて良く勉強している人物だ。「存慮の筆記を見ず」この幽谷先生が、色々抱いていた、また考えておったその書物を見せて下さった。その時同じくは、あなた、このようにしたほうが宜しいのではないか、と言ったところ、「忽ち筆を取りて改めける、才子にして道理に達す」非常に才能がある。優れた人物だと。「奇也とてよろこび語る事ありける、」この幽谷先生と、高山彦九郎の歓談の様子が、充分ここにあらわれていると思います。これが、幽谷先生が抱いていた尊皇論、やがてこのことが正名論となつてまとまつていくわけです。幽谷先生と彦九郎との出会いは、これが最後となります。再び出会うことはありませんでした。その後、彦九郎は、太田から水府の天下野へ入りまして、木村謙次らと交流をするわけです。木村謙次の家にも泊まります。更には北上して、津軽の非常な、悲惨な天明の飢饉の様子を聞くわけです。それを以て、天下の政治を正さなければならぬ、という思いを強くしていくわけです。仙台の林子平の家を訪ねておりますが、この時すでに『海国兵談』を書き始めておりますから、外国の様子なども、充分意見を交換しておると思います。

付け加えますと、この時北へ向かった彦九郎の目的はなんだったのかと申しますと、ロシアの南下に対して、警戒を抱き、樺太へわたろうとしたのです。しかしながらこの時、アイヌの騒乱があつて渡ることが出来ず、津軽からまた引き返したわけでありませう。そうして京都に入り、岩倉具選の屋敷に入つて、そこで京都の人々と交流をするわけです。

寛政三年（一七九一）の一月七日には白馬（あおつま）の節会を拝観します。この後、「光格天皇が、『高山彦九郎といへるものをしれるや』とお公家さん達に下問しておられますよ、」ということ彦九郎が聞きまして、「われをわれとしろしめすかや皇の玉の御こゑのかかる嬉しさ」という歌を詠み、その後、吉兆、良い報せを示すという緑毛亀を上皇や天皇の勲覧に供するわけです。その後九州へ入つていくわけですが、この背景には、どうも光格天皇の父君典仁親王に、このお方は天皇の位には就かれなかつたのですが、上皇の称号を贈りたいと思ひ、それは最終的には実現はしなかつたわけですが、この尊号問題の実現を、彦九郎は担つていたのではないかとも思われます。吉村昭さんは高山彦九郎の旅を中心に描いてありますが、薩摩から筑前・筑後、豊前・豊後、さらには熊本です。これら九州一体の旅は、この尊号問題を鹿児島、薩摩藩の力を背景として実現させたい、そのような願ひを彦九郎は持つていたのではないか、というような推測をしております。しかしながらそれはなかなか実現しないで、しかも竹内式部の明和事件があり、林子平も『海国兵談』を著したことで処罰を受けたり、幕府の圧迫がひしひしと追つてきて、しかも尊号問題は実現をすることが難しくなつたというようなことから、彦九郎はその危機を乗り越えることができずして、自刃してしまつたのではないかと推測されますが、依然、真実は謎のようであります。それが寛政五年（一七九三）の六月二十七日。最も信頼をしておつた、また、安らぎの場所であつた久留米藩、ここに戻つた彦九郎が、儒学者で医師でもありました森嘉膳の家で自刃をします。四十七歳です。この時久留米藩は森嘉膳の家から、やがて、遍照院という真言宗のお寺がございますが、そこへ彦九郎を埋葬するのですが、その費用を藩が全て持つた。しかも墓碑を建てる費用まで藩が担つて居るので、そういうことからしますと、久留米藩がいかに彦九郎を温かく迎えておつたかということがわかつておきます。しかも、現在でも久留米市では、彦九郎の墓前祭を毎年しておるのです。また、彦九郎のお墓に行つてみますと、立派に祀られて居るので、その当時の有馬の殿様の意向を現在でも受け継いで居るので、こういう思いを太田市も受けて、出生地の太田市が、彦九郎を何も顕彰しないというのはおかしいのではないかと、という市長さんの意気込みがあつたようです。

これが幽谷先生と彦九郎との関係になります。その間に、幽谷先生にはお父さんの言徳翁（與右衛門）が亡くなっております。寛政三年の十一月の二十一日、立原翠軒の墓碑銘によりますと寛政二年となっておりませんが、ここでは寛政三年を採りました。その時、幽谷先生も三年の喪に服しております。その間に、寛政の五年ですが、『二連異称』、二連といいますが、小連と大連という人物が支那の古人としておりまして、この二人が非常に親孝行をつくすのです。そのことから、二連といいますが、親孝行を意味するようです。この『二連異称』の中には三年の喪に服した先人達、後村上天皇とか、義公等もそうでありますが、その方々のことが記されております。こうして幽谷先生も三年の喪に服して、立派に「孝」を實踐されるわけです。このような幽谷先生が、高山彦九郎の自刃を聞かれて、喪が開けて直ちにこの『高山処士を祭るの文』というものをしたためるわけです。

それでは、祭文の方をみていきたいと思えます。

祭文

維れ寛政六年、歳は甲寅に次る三月戊子の朔、越へて十一日戊戌、水戸の藤田一正、謹んで清酌庶羞の奠を以て、上野高山處士の靈に告げて曰く、嗚呼吾れ子と別れて、一日三秋、豈凶らんや不幸、自ら大憂に遭ひ、孤廬に泣血せんとは、再期末だ周らず、側に聞く、處士の暴して西州に死するを、夢みるが如く覚むるが如く、驚嘆休まず、一たび之を思ふ毎に、人をして悸を病ましむ、喪既に服を除し、月を閲すること凡そ四たび、乃ち始めて酒を取り、祭哭して位を為す、嗚呼子よ、奚を以てして暴死せるや。豈に誠に已む能はざる有りて已むか、將た已を得て已まざらんとするや、獨り夫の先哲身を守るの義を聞かずや、假使衾を啓き簣を易へもつて全歸せざるも、何すれぞ腹を割き腸を屠し以て死に就けりや、西海と東海と風馬及ぶ莫し、傳へ聞く之が紛々たるを、曷んぞ異議を免れん、人堯舜に非ざれば、誰か能く善を盡くさん、嗚呼子よ、吾れ其の變に處するを悲しむ、惟だ子の王母に供養し、湯藥に侍して倦まず、喪に服し冢に廬すること三年、実に今世の鮮しとすると、兄弟の撰を異にする、人心の面におけるが如きを奈んせん、既に棣萼の芳を聯ぬる無く、鵲鴝の原に在るを嘆ず、其の祖妣に於けるや、孝敬斯に至る、豈獨りの同胞のみ友愛存する莫からんや、噫彼の小人は、好んで人の悪を成す、爰に郷議の愈々喧なるに罹り、西の方に遊び、志を桑弧に償はんと欲す、宅一區、寧んぞ身を田園に終へんや、嗚呼子匡章に類する有るか、自ら吾賢の孟軻に非ざるを痛み、隸貌交接他日之が冤を雪がんと欲す、獨行異調、固より時俗の能く和する所に非ず、況んや乃ち生死の路を殊にする、千秋バク（貌にしんによう）として山河

を隔つ、昔予師に従ひ江戸に宦學し、始めて子と蓋を傾けて晤言するを得たり、久しくテキ（にんべんに周）儻の高節を想像し、忽ち奇偉の盛論に激昂す、吾何を以てか大兒忘年の交を辱くするや、獨り襴衡の偃蹇たるを愧づ、疾めば即ち藥を餽り、歸れば（即ち）行を送る、子の東するや又余が門を顧みる、堂に上り親しく拝して已に數歳、音容目に在って誼る可からず、嗚呼子夙に高尚の質を懷き、魯仲連の人と為りを慕ふ有り、難を排し紛を解く、戦国の策士に非ずと雖も、世を軽んじ志を肆まみにし、太平の逸民たらんことを庶ふ、能く王を尊び而して霸を賤しむを知る、豈に啻に當年の秦を帝とせざるのみならんや、タク中の装一錢無く、而してカイコウを弾じて以て津を問ふ、書は纔かに名姓を記するに足り、而も劍は身を防ぐに餘り有り、身國に爵位有るに非ず、仕へずして乃ち、朝廷に心す、赤狄の北陲を蠶食し、而して神州を窺ユするを聞き、其の後世天下蒼生の害とならんことを恐る、上下宴安、方に鴉毒に耽る、子獨り慷慨、命を受けずして以て私かに行き、陽つて浪客となり而して山水を漂遊し、陰に国家の為に虜情を偵探せんことを欲す、衣冠禮樂の文物をして、被髮左衽の羶腥に變ぜざらしめんことを期す、荳に萬里の外に封侯し、以て一身を富貴の榮に取らんと云はんや、杞人は天地を憂へ、而してヤモメは緯を恤へず、知らざる者は誣しるに狂名を以てす、一別の後杳として消息無し、或は其の北海より直ちに帝京に入ると傳ふ、豈に關防嚴禁、其の要領を得る能はざるか、抑も黠賊の潛謀、未だ狡計の其の形に見はるる有らず、志士の世を憂えるや百里を瞻言し、識慮の深長有り、偷情自ら喜び、快を一時に取るは乃ち愚人の常のみ、爾後三年、果して北使の事有り、關を叩き塞を款き、而して互市カク（てへんに雀）場を請ふ、既已甘言重幣以て我を誘ひ、しかのみならず虚聲恫喝以て其の富彊を誇る、彼將に還つて我国を股掌の上に遊び、以て其の志を得んとす、何ぞ我が国勢の陵遲せる、而して威武は張らず、中行の説に伏し、而も其の背に苔うたず、遂に醜虜をして我が東方を輕視せしむ、廊廟豈策を獻じ纓を請ふの土乏しからんや、徒らに草茅の人をして筆を投じて心傷ましむ、是時に當り、子其れ何くにか在る、劍に倚り而して子を長天の一涯に望む、它日國家或は子を得て之を用ひば、死を視ること帰するが如く、水火に赴いてしかも辭せず、當に惰夫をして敵愾の志を立たしめ、古人をして蹈海の奇を専にせしめざらしむべし、嗚呼晝夜の道、死生も亦大なり、太山鴻毛、輕重各々其の時有り、羞惡の義は天性に根ざす、道行く餓夫も、亦猶磋商の食を屑とせず、唯豪傑の士は、能く忍ぶこと有つて大謀を成す、胯を出て履を取るの辱、皆之を為して疑はず、惟だ子の羈旅するや、備さに險阻の艱難を

嘗む、千辛萬苦、其れ誰にか語らん、鹿児島之行、筑州の寓、豈節を屈し以て心思を拂亂する有らんや、惜しいかな、身を以て君父の急に殉ずる能はず、空しく劍鏃に伏して以て鮑焦の徒と歸を同じくす、絶に臨み従容として、天下の人に謝す、萬里之を聞いて、我心をして悲しましむ、英魂招くも返らず、彼の白雲を仰げば而して神馳せ、寤寐の間に耿々たり、猶其の雄偉の氣と魁岸の姿とを見るがごとし、吾れ既に兒女子の態を作し、而して子を弔するを欲せず、風に臨んで悵然、獨り涕淚の相隨ふを覚えず、疇昔を感念し、哀しみを一奠の詞に寄せり、惟れ子の知る有らば、髣髴として来つて此の卮を挙げよ、尚くは享けよ。

（『幽谷全集』原漢文）

史料の方は、『幽谷全集』の中にあります文章を採らせていただきました。それから、この文章の読み下したものを載せておきました。祭文というのは、目上の方々に對する弔辭ということでございます。そこで、高山處士、この處士というのは、才能がありながらも、仕官していない者を處士と申します。そこから「高山處士を祭るの文」ということです。作成されたのが寛政六年（一七九四）の三月ということでございます。初めに、祭文の形式をみてみますと、「告文形式」となっております。祭文の書出しは、全てこのような文章で始まります。それからこの祭文の場合には、漢字四字ずつ、そして四字と四字ですが、四字が二句、これで對をなしております。この祭文そのものと申しますのは二行目の「嗚呼。吾與子別。」という所から最後の所までです。これが祭文になるわけです。その中で、漢字四字ずつまいりますから、二行目の中程ですが、「一日三秋。豈圖不幸」というこの四字ずつが一つの對になるわけです。それから「自遭大憂」というのと「孤膚泣血」という、このくぎれるところで對になるわけです。そうしますと、「一日三秋」の秋という所と、「自遭大憂」の憂、これがシユウとユウというように韻が同じになります。それから三行目の中程に「令人病悻」というのがあります。この悻というのは、三行目の下の方ですが、「閱月凡四」という四という字があります。キとシというところで、同じ韻になるわけです。このようにして、祭文全体をみてまいりますと、韻がきちんとふまれておきまして、この祭文の形式に則っていることがわかります。これを初めに申し上げておきまして、中身に入らせていただきます。

「維れ寛政六年、歳は甲寅に次る三月戊子の朔越へて十一日戊戌」寛政六年（一七九四）この年は甲寅にあたります。三月一日が戊の子ですので、十一日は戊の戌になります。「水戸の藤田一正、謹んで清酌庶羞の奠を以て、上野高山處士の靈に告げて曰く」水戸の藤田一正が、謹んで、お酒と供物を供えて、祭壇を設けて高山彦九郎の靈に申し上げます。

「一日三秋、豈図らんや不幸、自ら大憂に遭ひ、孤廬に泣血せんとは」ああ、あなたと私が別れて三年が経ちました。まるで思いもよらないことでした。あなたが自刃されるというような大変な不幸にあおうとは。それを知って今一人涙にくれております。

「再期末だ周らず、側に聞く、處士の暴して西州に死するを」再びお会いできませんでした。ほのかに聞き承るところでは、あなたが、暴してというのはにわか、突然に、という意味です。にわかには九州で亡くなられたということ、

「夢みるが如く覚むるが如く、驚嘆休まず、一たび之を思ふ毎に、人をして悸を病ましむ」私は、夢かうつつか、信ずることができず、また、驚きに耐えられません。このあなたの不幸を思い起こすたびに、まるで胸が裂ける思いです。

「喪既に服を除し、月を閲すること凡そ四たび、乃ち始めて酒を取り、祭哭して位を為す、」喪既に服を除し、というのは幽谷先生のお父さんが亡くなられてから三年の喪が明けたことです。それが十一月でしたから、それから四カ月がたちました。そこで初めてお酒を取り、お祭りをし、哀しみの中にあなたに対し向かっているのです。

「嗚呼子よ、奚を以てして暴死せるや、豈誠に已む能はざる有りて已むか、將た已を得て已まざらんとするや」ああ、あなたはなぜ急に亡くなってしまったのか。どうしても果たすことができずに死を選んだのであろうか。また、自ら志すところを果たしたようであるけれども、猶満足がいかず死を選んだのであろうか。

「獨り夫の先哲身を守るの義を聞かずや、假使衾を啓き篋を易へもつて全歸せざるも、何すれぞ腹を割き腸を屠し以て死に就けりや」あなたは、先哲が命を大事にする、命を全うするという意味を聞いたことが有るでしょう。篋、というのは病床という意味であり、衾は布団ですので、布団や病床を替えてまでも、全快しないということから、命懸けで、全身全霊をもって事に当たっても猶、中々目的を達することができなかつたという意味にとれるかと思えます。それであっても、どうして割腹して死に至ってしまったのですか。

「西海と東海と風馬及ぶ莫し、傳へ聞く之が粉々たるを曷んぞ意義を免れん、人堯舜に非ざれば、誰か能く善を盡くさん、」丸州と関東と、遠く離れており色々情報が入り乱れ飛んで、中々事実が明らかになりません。ですから、色々誤解を生んでおられるかもしれません。大体人間というものは、堯舜のように、優れた君主でなければ、中々善を全うする、善を尽くすということは難しいものです。

「嗚呼子よ、吾れ其の變に處するを悲しむ、惟だ子の王母に供養し、湯薬に侍して倦まず、喪に服し冢に廬すること三年、実に今世の鮮しとするところ」そうでは

ありますが、ああ、あなたの急変に会って、非常に私は悲しんでおります。王母というのは祖母です。あなたが、おばあさんに法要をつくして、病を得ては、煎じ薬等を用いて良く看護されました。しかも、亡くなられてからは、喪に服して、小さい庵を造って三年もその傍に住いされ、喪に服した生活をおくられた。このようなことは、実に今の世には大変珍しいことで、実に貴いことでもあります、ということです。

「兄弟の撰を異にする、人心の面におけるが如きを奈んせん、既に棣萼の芳を聯ぬる無く、鶺鴒の原に在るを嘆ず、其の祖妣に於けるや、孝敬斯に至る」兄弟の撰とありますが、撰というのは、生き方、行い、と見て宜しいかと思えます。そこで、彦九郎の兄を専蔵と言います。お兄さんは高山家を守らなければならぬという使命があります。高山家は当時は旗本筒井の領地ですから、どうしても幕府中心の考え方になっていきます。ところが、兄弟の考え方の違いで、彦九郎の行いを、兄専蔵は決して喜びませんでした。逆に非難してやまない。こういう背景があるので、兄弟で行いが異なるということは、人それぞれが、心や顔が異なると同じようなことで、いたしかたがありません。棣萼と言いますのは、常棣（にわざくら）を意味するのです。「棣萼の芳」というのは常棣が美しいと同じように、兄弟の美しい愛情を示すということです。ですから既に兄弟愛は無くなっている、ということなのです。それから「鶺鴒の原に在る」というのは、兄弟が互いに急難を救うことを言います。せきれいというのは、飛ぶときは波状となり、行く時は常に尾を上下させている姿が見られると思います。これは危急を知らせているというようにとられるのです。ですから、お互いに協力しあつて、兄弟が急難を救う、そういう意味があります。しかしそのような、兄弟が助け合うということも今は無い。ああ、そのような助け合いの心があればなあ、ということです。そういうなかで、祖妣というのは亡くなられた祖母という意味ですから、亡くなられたおばあさまに対しては、三年の喪に、その墓前に於いて服された。これが孝養の姿としては最も重いもの、それをあなたはもう尽くされたでしょう。

「豈獨り同胞のみ友愛存する莫からんや」それでこの彦九郎の孝養心、孝敬心というのは、家族ばかりでは無くて、これは、他の人々に対しても注がれるものである。ということですよ。幽谷先生はそのように彦九郎の心を思いやっているわけです。

「噫彼の小人は、好んで人の悪を成す、爰に郷議の愈々喧なるに罹り、西の方に遊び、志を桑孤に償はんと欲す」一体、多くの人々、俗人は好んで人の悪を言いたてるものです。ですから特に兄弟仲の悪いこと、兄専蔵が郷里に残っている彦九郎

の妻や、子供達に対する仕打ち、そういうことも色々と噂をされたものだろうと思います。そういうことを思つて長くは生まれた郷里に止まることができずして、京を目指して旅にでようとされました。そしてしかもそれは、桑孤というのは、桑の木のことと言います。桑孤蓬矢（そうこほうし）と言つて、男児が生まれた時に、これを用いて、天地四方に射るわけです。これは、将来その子供が天下国家四方に雄飛せんという事を願う意味があつたということです。転じて男子が志を立てるという意味にとらえます。西へ、京へ旅立つということは、天下国家の革新という大きな志をなし遂げようと、このことでもつて兄弟なかが悪いようなことは、これで償いしよう。そういう願いがあつたのでしよう。

「宅一區、寧んぞ身を田園に終へんや、嗚呼子匡章に類する有るか、自ら吾賢の孟軻に非ざるを痛み、禮貌交接他日之が冤を雪がん欲す」宅一區というのは、住いとか、自分の持つている財産です。そのような物を守りながら、その生まれ故郷に、自分自身の一生を終えるということは全てではありません。ああ、あなたは、匡章と言いますのは『孟子』の離婁下三十章に出てまいります。齊の人であります。その善行のありかたはということ、意見が対立するのです。そこで、父親からお前のような者は勘当だ、というようなことを言われて、親元を追われて行くわけなのです。親元を追われてきましたから孝行ができませんで、匡章のことを周囲の人が、あいつは親不孝者だ、といつて批判をするのです。その匡章と同じ様に、あなたは郷里を離れて親孝行をしない、家を顧みない、こういう批判をされるわけです。しかしながら、自分は孟子のように賢者ではない。そのことを無念に思つていきましたが、礼儀正しく誠実な行動、これを尽くすことによつて、いつの日か、この郷里をすてた親不孝者と、こういう批判を晴らすと思われたのです。「獨行異調、固より時俗の能く和する所に非ず、況んや乃ち生死の路を殊にする、千秋（貌にしんによう）として山河を隔つ」あなたのような、高い志を持った行動は、もとより、世間の俗人が良く理解し、受け入れる所ではありません。ましてやあなたは、目的としている高い志を、命をかけて行動しようということではありませんから、このことを理解するのは、俗人にとつては中々容易なことではありません。それは一般の人々とは、遙かに大きな隔たりがあることでありますから、受け入れられること、理解されることは難しいでありましょう。

そして今度は自分のことにも、触れるわけです。

「昔予師に従ひ江戸に宦學し、初めて子と蓋を傾けて晤言するを得たり」昔、寛政元年ですか、翠軒先生に従つて江戸に遊学したときに、初めてあなたとさがずき

を傾けて、晤言するというのは対面するということです。向かい合って語り合うということですから。親しく語り合うことができました。

「久しく（テキ・にんべんに周の字）儻の高節を想像し、忽ち奇偉の盛論に激昂す、吾何を以てか大兒と忘年の交を辱くするや、」あなたとの語り合いは、卓越した人物のすばらしい志を伺い、しかも、天下国家を問題とする、そのような志に心昂ったものです。これは先程申しました、幽谷先生と彦九郎の出会いの所です。でお分かりかと思えます。あなたのようなすばらしい方と、忘年の交わりというのは、年令の差を問題としない交流です。あなたのような優れた先輩と交わりを保つことができましようか。思いもかけないことでした。

「獨り禰衡の偃蹇たるを愧づ、疾めば則ち薬を餽り、帰れば（則ち）行を送る」でありますから、自分は今まで、禰衡というのは、後漢、般の人です。字が正平、若くして才弁があり、性格は剛傲。最も文筆に長じ、筆を執れば千言、すばらしい長い文章のことですが、たちどころに成ったといわれた。魏の曹操らに仕えるがその驕慢の為に排斥されて、最後はその家臣達に殺されていった人物です。非常に才能豊かでありましたが、性格が驕慢であったという人物です。そういう禰衡の偃蹇、自分の才能をひけらかすような、そういう態度を、驕慢な態度を、自分は恥じなければなりません。これは幽谷先生の謙遜です。私もあなたのように、孝を尽くしたいと思う、孝養心を尽くしたいと思う、こういう意味かと思えます。そこで、その後、寛政二年に、彦九郎が幽谷先生を訪ねるところです。

「子の東するや又余が門を顧みる、堂に上り親しく拝して已に數歳、音容目に在つて誼る可からず」あなたが、私の家を訪ねて下さった時に、家が上がって親しく語り合った。それも既に數歳、三年位でしょうか、三年余りになります。その時の声や、姿が目には焼きついて忘れることができません。

「嗚呼子夙に高尚の質を懐き、魯仲連の人と為りを慕ふ有り、難を排し紛を解く、戦国の策士に非ずと雖も、世を軽んじ志を肆ままし、太平の逸民たらんことを庶ふ」ああ、あなたは、非常に崇高な志を懐いて、魯仲連という人を慕って行動しておりました。その為には、艱難辛苦をもともしない、そういう強い気持ちがあるならば、当然であるかもしれないが、そういう時代ではないけれども、世俗になじまず、志を強固に持って、逸民というのは世を離れるということです。大平の逸民ですから、太平の世に満足しない人物、太平の世からは外れた人物であるということをご信念としておりました。

「能く王を尊び而して霸を賤しむを知る」尊皇斥霸ということです。

「豈に啻に當年の秦を帝とせざるのみならんや」魯仲連が秦に屈しないということとを述べましたが、そのようなことばかりではなくて、根底には尊皇の心が強く在っていたのでした。

「タク中の装一錢無く、而してカイ（くさかんむりに朋にりつとう）コウ（いとへんに侯）を弾じて以て津を問ふ、書は纒かに名姓を記するに足り、而も劍は身を防ぐに餘り有り」旅に携えていた袋の中には一錢も無く、カイコウというのは、柄を油茅という茅で巻いた劍のことです。粗末な劍を意味します。携えていた劍等を叩いて、津を問う、案内を求めた。書はわずかに、名姓を記すのに足りればよく、劍も、護身用にしては立派なものであった、ということでした。

「身國に爵位有るに非ず、仕えずして乃ち、朝廷に心す」自分は高官についているわけではない。どこにも仕えずして自分がお仕えするのは朝廷のみである。朝廷にお仕えする気持ち、これだけである、ということでした。

「赤狄の北陲を蠶食し、而して神州も窺ユ（穴かんむりに兪）するを聞き、其の後世天下蒼生の害とならんことを恐る」赤狄というのはロシアです。北陲を蠶食するのは、北方を侵略することです。ロシアが日本の国を侵略しようと窺っているというのを聞いて、天下万民、即ち日本国家の害となるであろうということを、あなたは恐れたのです。懸念されたのです。

「上下宴安、方に鴉毒に耽る、子獨り慷慨、命を受けずして以て私かに行き、陽つて浪客となり而して山水を漂遊し、陰に国家の為に虜情を偵探せんことを欲す」そのような危険が迫りながらも、国民全体は、挙げて油断している。まさに、鴉毒というのは激烈な害毒のことをいいます。まさに激烈な毒を食らったようだ。であるからこそ、子ひとり、嘆き憤り、誰に命令をされたということなくして、自らひそかに浪人となって、旅を重ね、国家の為に、ロシア、さらには外国の状況を探ろうと、そういう志を立てられたのです。

「衣冠禮樂の文物をして被髮左衽の羶腥に變ぜざらしめんことを期す、豈萬里の外に封侯し、以て一身を富貴の榮に取らんと云はんや」衣冠禮樂の文物は歴史伝統、と表現して宜しいと思います。被髮左衽の羶腥というのは、髪を振り乱したまま結ばないとか、左前に着物を着るとか、これは夷狄の風俗を示すのです。このことから、外国に侵略され、汚されることを言う、そういう意味です。ですから、外国の侵略にさらされ、汚れることのないようにとの深い覚悟から旅立ったことでした。決して、他の藩に仕えて、自分自身だけが、裕福な生活をしようという気持ちからではありませんでした。

「杞人は天地を憂へ、而してヤモメは緯を恤へず、知らざる者は誣しるに狂名を

以てす」杞憂という言葉がありますが、天が落ちてこないか、というような心配をすることです。杞人が自然の崩壊を憂えた。さらには、嬭は機を織るのに、緯というのは横系のことです。横系の少なくなつたのを憂えないで、それをさておき、周が滅びる、国家が滅びるということを憂えたのです。それは、国が滅びるということとは、やがて自分に及んできて、機など織っておれないということです。ですから緯を恤へず、というのは、国家の存立を真剣に考えたということになります。杞人や嬭のように、天下国家の行く末を憂えた結果でありました。それを知らない者は、あなたを狂人として批判するではありません。

「一別の後杳として消息無し、或は其の北海より直ちに帝京に入ると傳ふ、豈關防嚴禁、其の要領を得る能はざるか」あなたとお別れしてから杳として消息が知れませんでした。聞くところによりますと、北方へ向かった後、その後すぐに京都へ入られたと伺います。しかしながら、関所の取調べ等は厳しく、果たして無事に通行できたのでしょうか。

「抑も黠賊の潜謀、未だ狡計の其の形に見はるる有らず、志士の世を憂えるや百里を瞻言し、識慮の深長有り、榆情自ら喜び、快を一時に取るは乃ち愚人の常のみ」黠賊というのは、ずる賢い輩という意味です。ロシアを初めとしての異国勢です。その狙い、はかりごと、が表面化しておりません。しかし、天下の志士が世を憂えるということは、百里を瞻言する、遠く将来を見通すということです。しかも深慮も遠望もあるということです。その反対に、怠惰に耽つて、一時の安全に満足しているのは、世俗の常とするところです。

「爾後三年、果して北使の事有り、關を叩き塞を款き、而して互市カク（てへんに雀）場を請ふ、既已甘言重幣以て我を誘ひ、しかのみならず虚聲恫喝以て其の富彊を誇る、彼將に還つて我国を股掌の上に遊び、以て其の志を得んとす」果たして、あなたが北方へ向かつてから三年、ロシアのラックスマンが根室にやってきました。そして開港を求める。互市かく場、通商貿易を請うということです。既已というのは特にという意味があります。特に、甘い優しい言葉や進物を以て日本を誘い、或いは逆に、盛んに高圧的な姿勢を以て臨み、脅してくるということです。しかも自分の国の富国強兵を誇った。逆に一時的に我が国を股掌の上に遊び、見下して、赤子のように操ろう、そしてその志を遂げようとしているのだ、ということです。

「何ぞ我が国勢の陵遅せる、而して威武は張らず、中行の説に伏し、而も其の背中に荅うたず、遂に醜虜をして我が東方を軽視せしむ」そういう中であつて、自分の国は、陵遅せるというのは、丘が崩れて低くなるということで、国が衰えるとい

う意味になります。国は衰え、武備は充実せず、中庸の説といいまして、安閑としているという意味かと思えます。しかも自ら警鐘を鳴らさず、奮い立つこともなく、遂に外国がわが国を非常に軽く見るようになりました。

「廊廟豈策を獻じ、纓を請ふの士乏しからんや、徒らに草茅の人をして筆を投じて心傷ましむ」しかしながら、廊廟、これは幕府をはじめとする政府です。この政府に対して、意見を具申し、纓を講ふというのは、自ら仕えて、任務を全うしようという真の武士のことを言うのです。そういう優れた真の侍という者が少なくはないはずです。なにも具体的に策を講じようとしなから、庶民の中の心有る人達をして、実にやりきれぬ思いにさせております。これが当時の日本の実情でありました。

「是時に當り、子其れ何くにか在る、劍に倚り而して子を長天の一涯に望む、它日國家或は子を得て之を用ひば、死を視ること帰するが如く、水火に赴いてしかも辭せず、當に情夫をして敵愾の志を立たしめ、古人をして蹈海の奇を専らにせしめざらしむべし」このような風潮の中であつて、あなたはどこに、今おりましようか。劍を具しながら、遙彼方にいるであろうあなたに思いを走せております。あなたが生きていて、国があなたを用いて、活躍の場を与えたならば、あなたは、死を恐れず、危険艱難を恐れず、水火に立ち向かうように活躍するでありましよう。それは、強い強固な志を直しめて、魯仲連が勇氣と高潔を以て称えられました。それは魯仲連一人のことだけではなくて、ここにも彦九郎がいるぞ、というようなことにもなるでしょう。彦九郎に期待するところです。

「嗚呼晝夜の道、死生も亦大なり、太山鴻毛、輕重各々其の時有り、羞惡の義は天性に根ざす、道行く餓夫も、亦猶磋來の食を屑しとせず」人の生き方として、死というものは根本の問題であります。しかし、その道義道徳というものを考えた場合に、それは時によって輕重が有りました。また、恥を知るといふ武士の心、人間の心、その羞惡の心は人間本来持合せていたものであります。ですから、道行く餓夫、飢えた人です。いくら飢えた人間でも、磋來の食というのは、さあ、さつさと来てこれを食らえと、投げられたようなもの、そういう無礼な態度で差し出された食べ物のことを言いますが、いくら飢えていても、投げられた様な物は食べないであります。

「唯豪傑の士は、能く忍ぶこと有つて大謀を成す、胯を出て履を取るの辱、皆之を為して疑はず、惟だ子の羈旅するや、備さに險阻の艱難を嘗む、千辛萬苦、其れ誰にか語らん」豪傑というのは、大きな志を実現しようという場合には、時には我慢することもあります。股をくぐって草履を取るといふような恥を忍ぶこともあり

ます。これは止むを得ないことであります。しかしながらあなたの羈旅、旅については、語り尽くせない程の、非常に厳しい苦難があったことでありましょう。

「鹿児島の行、筑州の寓、豈節を屈し以て心思を拂亂する有らんや、借しいかな、身を以て君父の急に殉ずる能はず、空しく劔鋌に伏して以て、鮑焦の徒と歸を同じくす」この鹿児島や筑前・筑後、あるいは肥後熊本、このような九州各地の旅は自分の信念を曲げて屈することがあったのでしうか。あなたにはそれは全く無かったでありましょう。残念なことはあなたが命をかけて、君父の急に殉ずる、そういうことができなかったことであります。自刃してしまつて、鮑焦というのは、周の隠士で、天子に仕えず世を批判し、廉潔な行為を通していたのですが、孔子の弟子の子貢に謗られ、木を抱いて死んだ人物です。非常に高潔な志を立てておったのですが、遂に命を全うすることができませんでした。それを実践することはできなかったというふうに取りつた方がよろしいかと思ひます。あなたも自分の高い志をついに実現することはできませんでした。しかしながら

「絶に臨み従容として、天下の人に謝す、萬里之を聞いて、我心をして悲しましむ」あなたが最後に従容として、天下の人々に感謝されておつた。その見事な最後のことをはるかに伺つて、非常に悲しく又無念なことでした。

「英魂招くも返らず、彼の白雲を仰げば而して神馳せ、寤寐の間に耿々たり、猶其の雄偉の氣と魁岸の姿とを見るがごとし」今となつては、あなたの靈魂は再びこちらにかえることはできません。寤寐の間というのは寝ても覚めてもということですね。常に煌々として輝くものがあります。それはあなたの雄々しき氣迫と、逞しい雄姿を見る思いであります。

「吾れ既に兒女子の態を作し、而して子を弔するを欲せず、風に臨んで悵然、獨り涕淚の相隨ふを覺えず、疇昔を感念し、哀しみを一奠の詞に寄せり」私は、婦女子のように単に嘆き悲しむ、そういう弔いはしたくはありません。しかしながら、あなたの姿を思い起こしては心寂しく自然と、涙が流れ落ちるのを禁じ得ません。あなたとの以前の、交際のあつた日々を思い起こし、哀しみの日々をこの手向けの言葉に、述べさせていただきました。

「惟れ子の知る有らば、髣髴として来つて此の扈を挙げよ、尚くは享けよ」あなたが、この私の思いを知ることがあつたならば、ほんやりとでも良いから、私の前に来て下さつて、共に盃を挙げて下さい。願わくは私の心をお受け下さい。

以上が、幽谷先生の「高山処士を祭るの文」でございます。非常に長いものであります。しばしば交流を重ねて、志を共にすることではありません。ほんの数回会つたことで、感嘆相照らし、この祭文を認めるところに、幽谷先

生の彦九郎に対する思いが現れていると思います。現在は、この旅することについて色々な形がありますが、彦九郎の場合には、天下国家を考える人々と会って、そして学問を更に深めようというところに、その狙いがありました。この彦九郎は、戦国時代、戦いのある時代とは違って、武士は、平時にあつては、旅を重ねて学問をする。それが武士の務めだといっております。そのような中で、色々な人々に出会ったの感想は、「君を思う心の人を訪ぬるに親を養う者にぞありける」という歌を詠んでおります。天下国家を憂える者、また、天皇陛下のことを考えて行くという人々は、非常に親孝行だ、ということをやっております。そして、その旅によって出会った人々、この出会いというのが今日大事なことだと思います。幽谷先生が長久保赤水、立原翠軒と出会い、先生として学びましたが、また彦九郎と出会ったことで、非常に尊皇心を確信し、深めていくわけです。こういう所にも旅の意義があるかと思えます。更には、戦後の歴史教育は、社会経済的な研究が進みました。それはそれでよいことありますが、逆に人物から学ぶということが薄れております。この私どもの銘文に学ぶというものは、その先人の心を学ぶところに意義があるわけでありまして、先人への畏敬の念を育て、この方々の理想を自分もその一つとして、邁進していこう、そういう強い心を育てていくことによって、今盛んに言われている、生きる力、こういうものを育て、そして正しい生き方を強く学んで行きたいものだと思います。

充分理解が深まりません中で申し訳ありませんが、以上をもちまして終わらせて頂きます。どうも失礼を致しました。

(平成八年九月一日講座)

(県立太田第一高等学校教頭)